

「こどもまんなか社会」に向けて

こども家庭庁が4月に発足しました。この国の社会の形を子ども中心に変えていくことを目指して「こどもまんなか社会」を掲げています。

子どもや若者が自分らしく成長できる社会づくりに向けて、幼稚園・こども園・保育園や保育者の果たす役割は大きいといえます。

玉川大学の 大豆生田 啓友（おおまめうだ ひろとも）教授の記事を紹介します。

☆キーセンテンス

- 子どもの声を真摯に聴く
- 個人として多様性を尊重する
- 家庭との連携を大切にする



「こどもまんなか社会」とは、子どもが一人の「人」として尊重される社会だとも言えます。そのために、園や保育者ができることは何でしょうか。

第一には、**子どもの「声を聴く」**ことが重要です。ここでの声とは、単に発せられた声だけではなく、言葉にならない「心の声」も含めた声です。

昨年、ある認定こども園でのサークルタイム場面を中心に映画化した「こどもかいぎ」（豪田トモ監督）が上映され、大きな反響がありました。その中に登場するある保育者は、「今までも子どもの声を聴いてきたつもりだったが、十分ではなかった」といった意味の発言をしています。

それは、まるくなって話す場では、大人の予想を超えた発想や考え、優しさ、家族に対しての思いなどを持っていることが垣間見え、子どもの力に驚かされたからです。子どもの声を真摯に聴くことは、子どもを「人」としてリスペクトすることにもつながります。

第二には、**一人一人が個人として多様性が尊重される**ことです。この映画の中で全く話そうとしない子どもが出てきます。保育者はその姿を問題視するのですが、映画の最後の方で、その子どもは話さなくても他の子どもの声を聴くことをとても大切にしていることが見えてきたのです。そして、その子どもは卒園間際、自分の言葉で自分の将来の夢を話せたことをとても喜んでいました。その子どもが全く話さなかったとしても、対話への参加の在り方は多様でよいことが分かります。ほかに保育者が「困った」と感じる様々な子どもがいます。でも、子どもの視座に立って考えてみれば、困っているのはむしろその子ども自身なのです。

映画でも他の子どもをすぐにたたいてしまう乳児が出てきますが、その子どもに対して保育者はぎゅっと抱きしめ、頭を優しくなでる場面があります。その子どものたたきたくなる心持ちを受け止めようとしているのです。すると、その子どもの表情は和らぎ始めます。それは、その子どもの個性を尊重することでもあり、心の声を聴くことでもあるのです。

第三には、**「こどもまんなか」保育を社会につなげる**ことです。まずは家庭との連携が大切です。園で子どもを尊重する姿勢は家庭にもつながっていきます。

さらに、これからは、園が地域の真ん中で存在感を持つことが大切です。少子化だからこそ、小学生以上の子どもや地域の多様な住民など多くの人々が乳幼児と日常的に関わり、共に育ち合うコミュニティをつくること。それが、子どもを産み育てることの喜びを共に実感する、持続可能な社会づくりにつながるのだと思います。

現在、日本社会は閉塞感にあふれています。しかし、私たちは「子どもたちの未来が希望を生み出していけること」を実感させることが大切です。だから子どもの個々のアイデアで園の運動会の種目を決めたりすることなど、園という社会の文化的実践を自分たちで生み出すことによる自尊心の形成は極めて重要だと思うのです。

それは行事だけではありません。日常の中で「あなたはどうしたい」と個々の多様な子どもの声が聞かれる実践コミュニティにおいては、自身が重要な市民社会の担い手であることを実感できるのです。それは、保育の場から民主的で持続可能な社会をつくることにもつながると思います。

セルフチェック

「食う寝る遊ぶ」がバロメーター



産業医の三宅琢さんが日本教育新聞に、掲載された記事を紹介します。

メンタルヘルスを維持するためにはセルフチェックがとても大切です。

無理がたたって一時的に体調が悪いのか、モチベーションが下がっているだけなのか、それとも病院に行って相談しなければいけないレベルなのか。その判断を本人ができるようになることが、メンタルヘルスを保つことにつながります。

政府も必要性を認識し、ストレスチェックの実施が法律で義務付けられましたが、ストレスチェックのアンケートに答え、年に1回ストレス状態を評価するだけでなく、日々のセルフチェックで自分を客観的に見られる（メタ認知）ようになることが重要です。

具体的には、私はいつも一言で「食う寝る遊ぶ」が普段通りできているかを確認することがセルフチェックだと伝えています。メンタルの不調の原因となる自律神経の乱れが、ここに表れやすいのです。

自律神経は人間が生きていくうえで必要な環境を維持するため、脳が指示しなくても自ら呼吸を整えたり体温を一定に保ったりする機能を持っています。交感神経と副交感神経で構成されていますが、現代人は緊張時に働く交感神経ばかりが優位になりバランスを崩してしまうのです。

趣味のことをしているのに楽しめない、食欲や睡眠が乱れてきている。そんな状態が2~3週間続くようなら、自分で立て直そうと頑張り過ぎず、専門家に相談すべきです。

こんな教具が 会話が生まれるカード・絵本

「すきなのもどっち？」 えらんできめてつたえるゲーム

自分の「好き」を伝えよう 相手の「好き」を聞いてみよう

筑波大学附属大塚特別支援学校 教諭 佐藤義竹 考案

カードに書かれたテーマに沿って考えたことを伝えたり、二つの選択肢からどちらか一つを選んだりして、表現するゲームです。勝ち負けや正解・不正解はありません。自分のことを伝え、相手のことを理解することを大切にしています。

「△△さんは~と思うんだね。私もそうだよ。」「私は~と考えるけど、どっちもいいよね。」といった会話が生まれます。自他の気づき、お互いを受け入れる場など、安心できる環境に欠かせない時間を共有することができます。

このカードは、仲間づくり・社会性という点から特別支援学校や特別支援学級・通級指導教室でもよく使われています。

それと今使われている小学校6年生の国語の教科書にもよく似た学習があります。二つのもののそれぞれの利点などを様々な立場になって考え、相手になるほどと納得できるように伝えるという5月頃の単元です。（話の内容をとらえて、自分の考えをまとめよう「聞いて、考えを深めよう」）内容の合理性も、表現での説得力も磨かれる単元です。

また、同じタイトルで0歳児にも使える絵本も出ています。言葉と絵を一致させる指差しから始まり、自分が好きなほうを示す意思表示や、その理由を話したり聴いたりする活動へ広がっていきます。もう既にお持ちの園も多いかもしれません。

それぞれの年齢に合わせて、使い方はいろいろ工夫できます。興味のある方は一度調べてみられてはいかがでしょうか。



カードゲーム



絵本